

第百七十八話 同床異夢の「絶対」も虚し！

日米英蘭戦は、南東方面の戦況圧迫、アッツ島の玉砕、欧州戦局では、北アフリカ戦線の終焉等があり、太平洋全域からインド洋に至る防衛態勢の強化が喫緊の課題となった。大本営は、一旦間合いを切って態勢整理を策すことを決定し、1943(S18)年9月「絶対国防圏」を設定した。然しながら、本構想には、内包する深刻な問題もあり、予期の成果を得ることなく水泡に帰した。本話ではそれらを管見する。

1 絶対国防圏設定に至る経緯

伸びすぎ・広がり過ぎた戦線の防衛は、国力の限界であり、絶対確保すべき後方要線に態勢整理すべきであるとの論が、1942(S17)年12月頃から、企画院、陸軍省関係者、大本営陸軍部等から出されていた。第八方面軍の意見も寄せられていた。海軍側にも戦線縮小を要するとの意見もあったが、大勢は現戦線からの後退に強力に反対していた。

海軍は、3月「第三段作戦計画」を発令し、連合艦隊は、邀撃帯構想を含む[Z作戦]の要領を指示した。然し、マーシャル諸島失陥に伴い、1944(S19)年2月マリアナ、カロリンを第一線邀撃帯として決戦する構想へと転換して、陸海の構想がマッチした。

8月中旬以降、陸海軍統帥部の合同研究等を経て、新戦術方針の御裁可を得て、9月25日、大本営政府・連絡会議で「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定した。



2 絶対国防圏

「千島～小笠原～内南洋(中・西部)～西部ニューギニア～スダダ～ビルマを含む圏域」、その「要領」に、海軍の強い要望もあって、「随時敵の反攻勢力を捕捉破砕す」と挿入

3 絶対国防圏の瓦解

国防圏の前方要線のギルバート、マーシャルでは海軍の決戦は行われず、陸軍の派遣もないままに失陥した。更に、1944(S19)年中期には西部ニューギニアと内南洋方面に米軍の攻撃を受け、西部ニューギニアの戦況打開はできず、マリアナ諸島の島嶼は相次いで占領された。マリアナ諸島の失陥(1944/7～8月)は即ち絶対国防圏の瓦解でもあった。

4 問題点は何か(紙幅の関係上項目のみ)

(1) 陸・海軍の作戦思想の相違

後方要線の確保を重視する陸軍に対し、海軍はその要線は反撃の為の進発線との認識であった。即ち、トラック、マーシャル諸島、ラバウル及びソロモンを主陣地と捉えるか前進陣地と捉えるかの認識の差があった。陸軍は機動防御的構想で、海軍は現態勢維持・早期決戦をあくまでも追求していた。

(2) 締結された中央協定に基づく連合艦隊への指示：マーシャル・ギルバート方面の前方要域における行動準拠付与→陸軍の認識とは相違→作戦指導の混迷？同床異夢

(3) 陸軍の太平洋正面への戦力転用 その規模・場所に関しては中央協定では明示無し 陸軍は十分な兵力を転用させたか？大陸打通作戦との並行実施等、真剣さ？に疑問

(4) 作戦準備の遅延 転用予定部隊に派遣中止や遅延等により防備準備の遅延(築城不十分等)、一部では海軍が放棄する地域に陸軍部隊が派遣される等ちぐはぐな面も

(5) 態勢が整わぬうちに航空部隊が損耗(ウエワク(1943/8)、トラック(1944/2)等) 予期以上に米軍の反攻が早かった。情報収集態勢は不十分？

(6) 陸海軍の相互不信 陸軍は後退思想と海は言い、海軍は戦略が解っていないと陸は非難。太平洋正面は海軍担当との暗黙の理解があって熱意・真剣味が足りぬ？

(7) 戦略転換に多大の時間(半年近くの論、海軍と陸軍の考え一致)を要し空費した？

(8) 全般戦争指導計画上の課題 各種ケースを想定していたのか？

* 戦局厳しき時ほど協同の実を挙げるべきなのだが、・・・

(第百七十八話 了)